

# 同時代史としての19世紀の世界

図版を活用した世界史授業の構成

鈴木 孝

世界史の学習において、教科書を読むことや教師の講義を受けることがどうしても中心となってきた。しかし、従来からこうした授業のスタイルに変化をもたせ、スライドやVTRなどの視聴覚教材も利用されていた。これは歴史事実を生きた内容としてとらえさせたり、生徒の感性にうったえてイメージ化を図る方法として有効であった。ただ、こうした視聴覚教材によって世界史の内容のすべてが構成されていたわけではなく、内容的に限定されていたのも事実である。そこで最近注目されているのが写真・イラスト・絵図などの図像資料であり、これらをてがかりにすれば従来の視聴覚教材では扱われなかった歴史内容を生きたものとして生徒に提示できると考えている。本稿は19世紀の世界史をこうした図版を利用して授業を構成する事例である。また、学習指導要領における世界史Aの「内容の取扱い」で示された方法を、実際の授業でいかしていく試論ともなっている。

<キーワード> 世界史 世界史授業 学習指導要領 同時代史 図像資料

## 1. 主題設定の趣旨

### 1-1. 同時代史の意味について

平成6年度から新しい学習指導要領が高等学校でも実施されている。すでに周知のように、従来の学習指導要領と比べて、地理歴史科が設定され世界史が必修科目に指定されたこと、それぞれの科目がA（2単位）・B（4単位）において多様化したことが大きな改訂点である。なかでも世界史Aは、近代以前の歴史を思いきって圧縮・精選し、近現代史部分を重点的に学習させようとしたものであり、各教科書の記述においても従来の記述と比較した場合18世紀までの内容は簡略化がめだっている。また、世界史Aでは「諸文明の接触と交流」の内容を指導する際に、「同時代史的な取扱いで世界の歴史の発展を学ばせること」とあり、世界史を横断的に概観させることを「同時代史的な取扱い」としている。「同時代史」の意味については一定ではなく、ある時代の歴史事実を同時代にいた人物や遺物などの「証言」や「証拠」を通して再現しようとする、すなわち当該時代の「現代史」であったり、ある時代に地球上に并存していた文化圏や地域世界を相互に関連させたり比較しながら時代の全体像を把握しようとするものであったりする。学習指導要領で示された「同時代史」は後者の立場をとるもので、通常近代以前の世界史の理解に役立てようとするものであった。しかし、こうした横断的手法は、19世紀からの世界史を「世界の一体化の過程」という

視点でとらえようとした場合に敷衍していくことも可能であろう。特にヨーロッパの世界支配をアジアの対応と関連させていく場合に有効な方法となる。本稿ではこうした世界史Aで提示された視点を考慮しつつ、図像資料を多用して19世紀の世界を授業で構成した実践例である。

## 1-2. 横断的にみた19世紀の世界

学習指導要領において19世紀の世界は以下のようにまとめられている。

<19世紀の世界の形成と展開>  
 ア. 19世紀のヨーロッパ・アメリカ  
 イ. 産業革命と世界市場の形成  
 ウ. アジア諸国の変貌と日本

これは必ずしも同時代史的な構成になってはいない。【イー産業革命と世界市場の構成】がそれに該当しそうだが、学習指導要領で示された内容は、技術革新、機械制工業、資本家と労働者、植民地の拡大、貿易活動、農業問題、都市と市民生活・市民文化などであり、欧米市民社会の形成と発展をグローバルな視点と社会史的視点でとらえていこうとするものである。「植民地の拡大」のなかでアジア・アフリカの動向を扱うように示されているが、【ウーアジア諸国の変貌と日本】という項目の内容と重複することになり、どうしても欧米社会の動向に重点がおかれてしまう。したがって、この学習指導要領で授業をシミュレーションするとつぎのようになる。

市民革命 → ナポレオン時代 → ウィーン体制とその崩壊・ナショナリズムの高揚 → アメリカ合衆国の発展 → 産業社会の到来とその文化 → 欧米諸国の世界進出 → アジア・アフリカの植民地化 → 日本の近代化

帝国主義時代の内容をも含んでいるところが新しいが、従来の授業と展開上さしたる変化はない。また学習指導要領に準拠した教科書ではさらに旧状に近くなるので比較しておく。

<19世紀の世界>  
 1. 革命の時代の欧米社会  
 2. ヨーロッパの進出とアジア  
 3. 帝国主義の時代

まず、19世紀中ごろまでの欧米市民社会の形成と従属するアジア諸地域を扱い、次に19世紀末ころから移行した帝国主義時代を扱うという手法である。19世紀の4分の3を産業資本主義の時代と

して主題化し、残り4分の1を帝国主義時代として主題化する伝統的な区分となっている。現場の多くの教師がこうした伝統的な授業のシミュレーションをしやすいということもあるのだろう。そこで、本稿では19世紀の世界を同時代史的手法で新しく構成しなおそうとした。以下に示すことによって比較に供したい。

<19世紀の世界>

1. 19世紀前期の世界
2. 19世紀中ごろの世界……………本稿での実践例
3. 19世紀後期の世界

【1－19世紀前期の世界】は、ウィーン体制に象徴される旧体制が自由主義によって払拭されていく過程を扱い、アジア諸国の伝統社会の矛盾が表面化し、ヨーロッパ諸国によるアジアへの進出が「点による侵略とその拡大」という様相を呈したことを中心に扱う。【2－19世紀中ごろの世界】では、イギリスを中心とした資本主義社会の到来と、自由貿易主義によるアジア諸地域の市場化を「面による侵略」として扱う。アジア諸地域では伝統社会が崩壊し、人びとの生活が変容していったところに植民地化の意味を理解させようとする。【3－19世紀後期の世界】は欧米市民社会が高度な技術革新によって成熟し、統一ドイツの出現やアメリカ合衆国の発展によってイギリスの覇権にかげりが見えはじめ、自由主義時代が終わって資本主義が変容していく時代としてとりあげる。科学技術の高度の発展は多様な地下資源を必要とし、アジア・アフリカなどへの進出も激化して「全体的侵略」となっていくことに着目させる。したがってアジア・アフリカ諸地域での対応も全体的な危機意識のなかで民族運動が高揚していくことを理解させる。このように19世紀の世界を大きく3期に区分し、それぞれの期についてヨーロッパ（アメリカ合衆国）とアジア・アフリカを横断的に概観し、グローバルな視点で内容を構成して授業展開をシミュレーションすることによって伝統的手法を克服してみたい。

### 1－3. 図像資料の利用について

世界史の内容を横断的に扱い、グローバルな見方をする場合、地図資料を用いることは通常よく行われることである。しかし、ここでは思いきって図像資料で構成しようとする。これは19世紀の世界を巨視的に概観しながら、その時代の本質的なことがらをつかませようとする際にイメージ化しやすい特質をもっているからである。もとより文献資料を軽視しているわけではないが、図像資料が示す場面は、その時代の重大な内容であったり、人びとの関心事であったりすることが多く、歴史の一コマを再現していたり、それを象徴していたりするので有効な教材になると考えられるからである。また、従来利用されてきた視聴覚教材とも異なったものである。世界史教材として開発されてきた視聴覚教材は、古くはスライドや写真集が主であったし、モニターテレビに映し出され

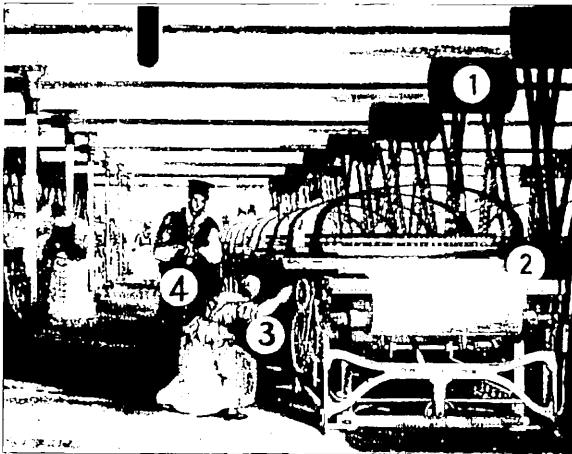
るVTR映像や録音された音声なども多くの教師によって利用されてきた。しかし、市販されているスライド教材やVTR教材は内容的に限られたものであり、教師が主体的に開発しようとする費用がかさみすぎる問題があった。ここでいう図像資料とは教科書や副教材に掲載されている図版を主にしたもので、内容も豊富で簡単に利用できるものである。従来は授業のなかで補足的に利用してきた図版を積極的につかい、むしろ図版を主にした授業を展開しようというわけである。ただ図像資料をながめるのではなく、そこに現れている場面がいかにかその時代の内容と関わっているかを知り、いかにか時代のイメージを獲得していくかが学習の活動となる。最近の教科書ではこうした図版の量が増加しているながら、どのように利用・活用していくかという事例研究が遅れている傾向にあり、本稿はそうした現状をふまえた事例ともなろう。

## 2. 「19世紀中ごろの世界」への図像資料

1-2で提示した内容で19世紀中ごろの世界を構成しようとして、今回選択した図像資料は以下のようなものである。授業の展開例に先だってそれぞれの図版についての解説を加えておこう。

### 2-1. 資本主義社会の到来

図版A：1840年ころのイギリス綿織物工場



巻とられた布であるが、単純な労働のため熟練工を必要とせず、③のような女子を多く雇った。労働者への監視は厳しく、④のように現場の監督が働き具合をチェックしてメモをとっているのがわかる。右の図版Bの紡績工場でも示されるように、女子労働とともに幼少年労働が普及し、1833年に制定された工場法ではこれらが規制されたことから、資本主義化の初期の過程では「生産」や「労働」の場面で多くの矛盾をはらむものとなっていた。

天井をほうのように多くの軸が並んでいるが、この軸が回転して①のようにドラムを回し、ベルトで機械に動力を伝えている。水力を動力源にしていたので工場は初め川沿いに立地されていたが、蒸気力の利用によって立地条件から解放されて、都市やその近郊に設立され、交通の整備によって運営が活発になった。②は

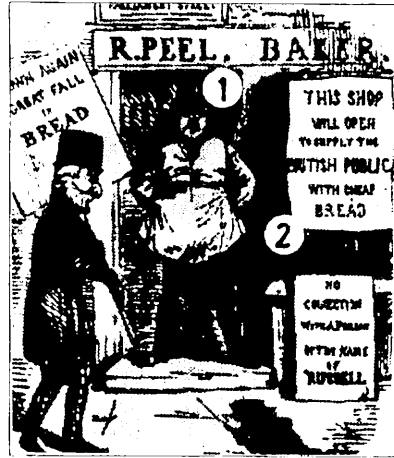
図版B：幼少年労働者



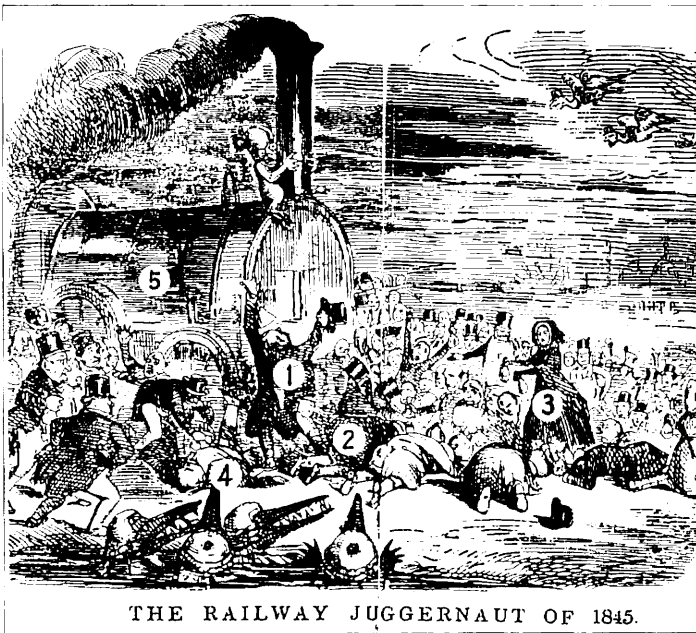
イギリスにおける資本主義の確立と自由貿易体制の確立を理解する際によく扱われるのが1846年の穀物法廃止である。

図版Cの中央に立っている①の人物が当時のピール首相であり、このパン屋では②のように、「この店は英国の大衆に安いパンを提供します」とあり、マンチェスター派の首領コブデン議員らが穀物輸入の自由化を宣伝してきた内容が読みとれるはずである。こうして自由貿易体制の最大の障害だった穀物法が廃止されたことで、保守的な地主勢力は大きな打撃を受けたように思われがちだが、鉄道ブームに便乗した投機によって利子獲得にはしり、新たな不労所得をえる道が開かれていたことに着目する必要がある。資本主義化のバロメータとして鉄道のネットワーク化があげられるが、イギリスでは1825年に最初の蒸気機関車がストックトン〜ダーリントン間を結んで以来、1840年代の

図版C：R. ピールのパン屋



図版D：1845年の鉄道ブーム



は鉄道建設のラッシュが到来し、図版Dに示されるような熱狂の状況となった。機関車を前にして①のように両手を挙げてこれをたたえる者、②のようにひれ伏す者、③のように供物をささげる者、④には失神する者まで描かれている。この熱狂の様はインド東部の地域で見られたクリシュナ神を祭る行事をモチーフにしたものとなっており、この祭で曳かれる巨大な山車を機関車にみたてたものである。タイトルにある「ジャガノート」はクリシュナ神のことで

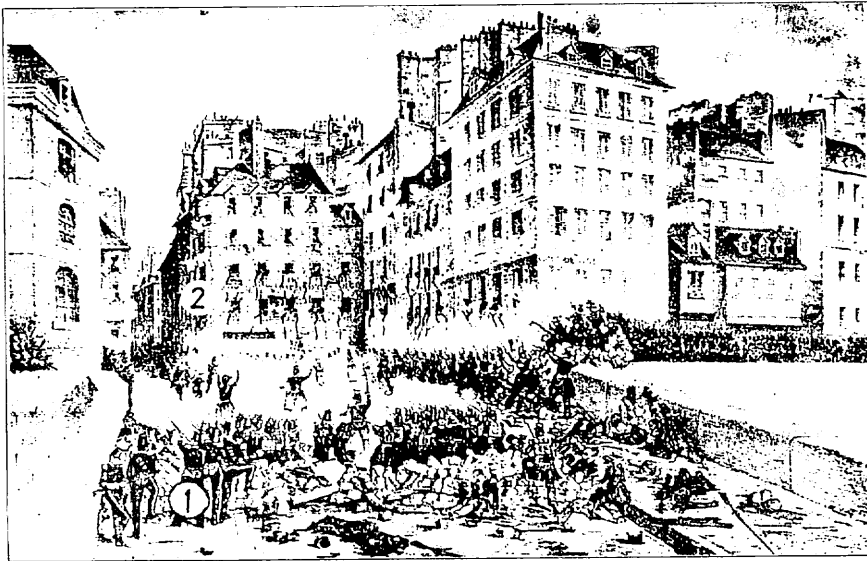
あり、人びとはこの巨大な山車にひかれて死ぬことを望んで突入する者が多かったという熱狂の祭礼であった。注意してみると機関車の側面には⑤のように「投機」SUPECULATIONとあり、1840～50年代のイギリスの鉄道ブームが投機熱をもたらし、利子・配当をあてこんだ投資家達の様子を表したものとなっている。鉄道時代の到来はイギリスの資本主義確立をものがたり、また同時に資本主義社会の到来によってひきおこされる様々な社会問題が誰の目にも明らかになってきた時代を表していた。

19世紀中ごろのヨーロッパは革命の時代でもあった。19世紀前期のヨーロッパで扱ったウィーン体制が崩壊したところに市民社会の到来が現れていた。図版Eはフランスの二月革命の場面である。革命という非日常的場面において民衆の熱狂的行動はつきものだが、テュイルリー宮殿を占拠した市民が王侯の使っていた椅子に座りふざけている情景が伝わってくる。二月革命は共和政府の樹立をもたらしただけでなく労働者・社会主義者の要求する政策の実施をもたらした画期的革命で、18世紀末の革命では不十分だった市民革命の性格をもった。ブルジョワジーが社会的覇権を握ったときに保守化する社会勢力となったのも19世紀中ごろの特色であり、下の図版Fはこれをものがたっている。

図版E：1848年二月革命



図版F：六月蜂起と反革命



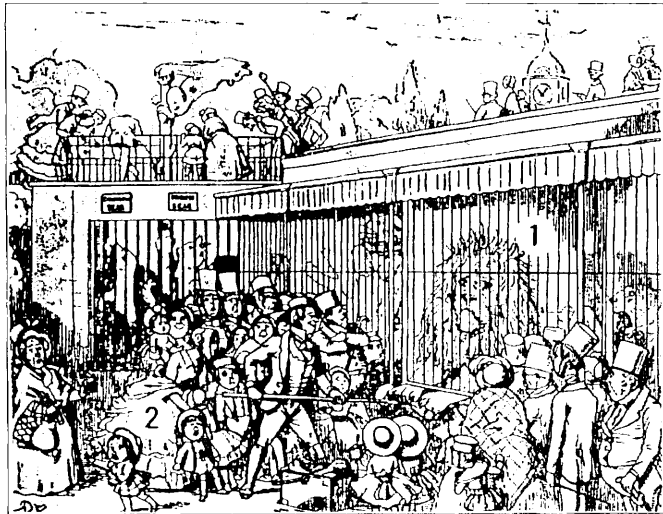
この民衆蜂起は政府による国立工場閉鎖に抗議して起きたものだが、手前の橋の上に①のように造られたバリケードを突破して政府側の軍隊が正面奥の建物が攻撃をしかけている。②の建物は「二人のピ

エロ」という名の服飾店であり、民衆はここにたてこもって抵抗した。建物の外壁にひび割れがはしり、激戦のなかで民衆の蜂起は鎮圧されていった場面となっているのがわかる。イギリスでも労働者勢力が参政権を求めて展開してきたチャーティスト運動が1848年には空前の高揚をみせ、東欧における「諸民族の春」という民族運動とならんで、ヨーロッパにおける革命的情勢をつくりだしていった。フランスでは反革命という形でブルジョワジーの覇権が実現したが、イギリスでは別の形をとったことも見逃すことはできない。イギリスでは革命的エネルギーをイベントやレジャーに転化することによって革命を予防しようとした。イギリスの繁栄という「特権」を享受させることは、資本主義社会の成熟によって露呈する矛盾を隠蔽する「装置」としての機能をはたしたのである。

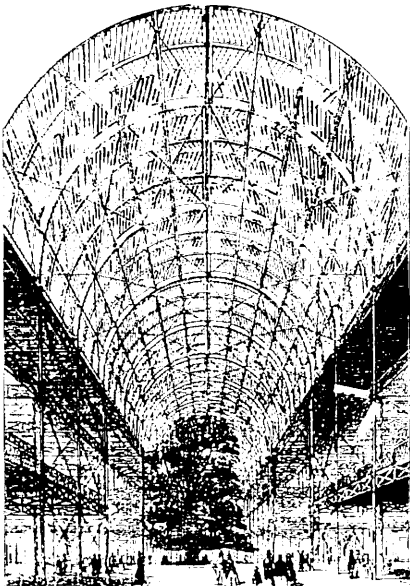
図版Gは1849年のロンドンにある

図版G：動物学会付属動物園

動物園である。①は悲しそうな顔すらしているライオンであり、市民の人気は草原の王に集まった。②のように子供の表情が豊かだが、家族連れでこうした動物園に遊びにくる市民層は限られていたとはいえ、見せ物を楽しんだりイベントに参加すること、旅行をすることなどは余暇の成立を前提とするが、次第に労働の目的の一つ



図版H：ロンドン万博の水晶宮

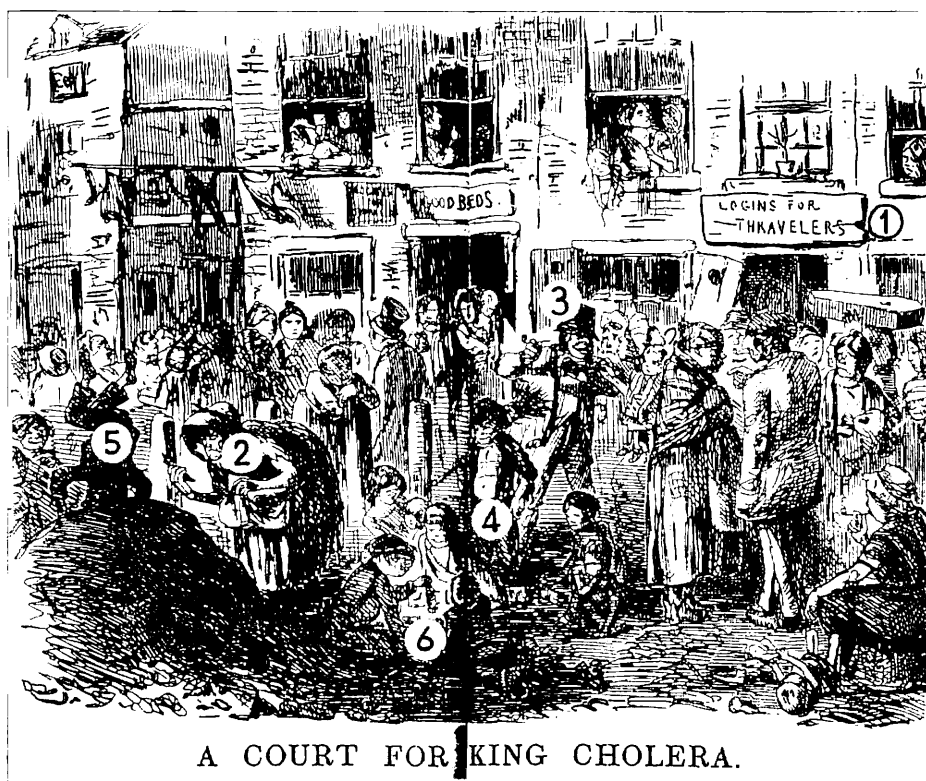


になっていく傾向もみせることから、革命という方向に向かないイギリスをものがたり、資本主義社会像を展望しているようでもある。革命を予防する装置としてのイベントは1851年の第1回世界博覧会が象徴している。図版Hは会場のシンボルとなったハイドパークに建設されたクリスタルパレスと名付けられた建造物で、鉄骨とガラスからなり世界の注目を集めたものである。図はトランセプト（袖廊）の内部であり、巨大な楡（にれ）の木をすっぽり収めてしまう高さ（約32.4メートル）をもった。博覧会は1851年5月1日に開会し、10月15日までの5か月半行われたが、入場料金には様々なランクが設定され、使用人や借地人クラスの市民も数多く入場したというからイベントとしては盛況であった。また、旅行社として有名なトマス＝クック

社が鉄道料金を格安にした万博向けのパックツアーを売りだしてヒットしたことからも、イギリス市民のなかにレジャーに金を使う風潮が現れてきたことを知ることができる。(クック社はその後パリ万博の際には海外旅行のパックを発売しており、旅行ブームをささえる企業として急成長を上げていったことで知られている。) 産業社会・市民社会は確実に到来していたし、「繁栄」は誰の目にも明らかであった。

しかし、こうした繁栄は社会の一面であり、同時に貧困や都市のスラムなどの問題も資本主義社会の到来の現象として扱う必要がある。次の図版Ⅰは「コレラ王の宮殿」と題されるものであるが、公衆衛生が都市計画に位置づけられる以前のロンドンでは、下層民が密集するスラムなどでは疫病が流行する状況として不衛生な都市生活が展開されていったのである。①には宿無しのための簡易

図版Ⅰ：A COURT FOR KING CHOLERA



宿泊所が表示されている。(図では安さを誇張するからだろうか、スペルミスが見られる。) そのこの2階から主婦がゴミを下に捨てている。また描かれる人びとはいかにも

貧しそうであり、②のようにゴミ溜から何かを漁る女性や、③のようにアイルランド人を思わせる人物(下層労働者が多かった)が見える。子供達の姿も興味深い。④に箒をかついでいる少年が描かれているが、これは街なかで貴婦人のドレスが汚れぬようにと、待ちかまえて歩くところを掃いて小遣いを稼ぐ少年などを示している。小遣い稼ぎといえば⑤も同様で、ここではゴミ溜の上で逆立ちをしているが、街なかで大道芸よろしく逆立ちをして銭をせびる少年も多かったようである。さらに⑥にはドブネズミを捕まえて遊ぶ子供が描かれているが、都市のスラムや下水溝に棲息する



ドブネズミを捕獲して、さるところに売って稼ぐことが成り立っていたのも事実であり、下層民の出入りする安いパブでは犬にドブネズミを追わせて見せ物とすることが流行したので、ドブネズミの需要が一方で存在していたわけである。(注1) 19世紀中ごろのイギリスの都市における下層民の生活ぶりを表した図版は数多く残っているが、繁栄と貧困が同時に共存する資本主義社会を生活面から印象づける資料としてこうした図版は有効である。

## 2-2. 市場化・植民地化されていくアジア（アジア社会の変容）

ヨーロッパにおける資本主義社会の到来と同時代のこととして、アジア社会の変容があげられる。むしろアジア社会はヨーロッパ資本主義との関係において変容したというべきで、その有機的関連がなければ同時代的世界として19世紀中ごろの世界は考えにくいのである。19世紀前半から中ごろにかけて、アジアのほぼ全域でヨーロッパ勢力の進出によってその伝統的社会が影響を被る事態が

図版J：列強の使節を引見するムハンマド＝アリー



見られた。資本主義の確立は自由貿易の推進を経済政策としたが、アジア諸地域ではこれに受けとめていったのであろうか。左図は1839

年においてエジプトの太守ムハンマド＝アリーがヨーロッパ列強の外交使節とアレキサンドリアで会談している様子を示している。ムハンマド＝アリーは1831年にオスマン帝国からの自立を達成したが、1839年には列強の圧力を受け、自由貿易のためにエジプト市場の開放を約束しなければならなかった。ムハンマド＝アリーはエジプトにおける綿花産業の開発者でもあり、特にイギリスにとっては有力な市場となりえたし、何よりもインドへの中継ポイントとして重要な場所であった。エジプトはムハンマド＝アリーの自立と王朝化を列強に保障される代償に、自由貿易のための市場になっていった感があった。次の図版Kは同じ1839年における中国のできごとを示している。①の人物は道光帝から欽差大臣に任命された林則徐である。彼は当時大量に流入するアヘンを厳重に取り締める責任を果たし、この年イギリスの自由貿易商人ジャーティン＝マゼソン商会などが持ち込んでいたアヘン2万余箱（一箱65Kg入り）を没収し、広州港の入口にあたる虎門において処分した。

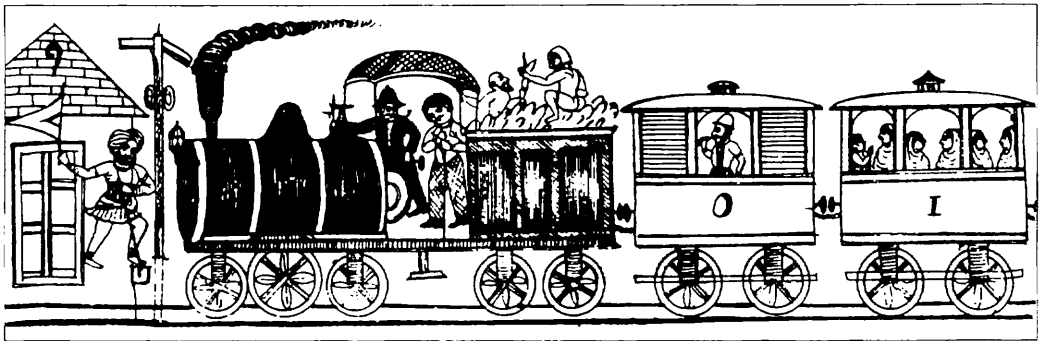
はじめは②のように土中に埋めようとしたらしいが、その土を再度精製すると何割かのアヘンが残存することが分かり、通常いわれているように溝に水をひいて消石灰と塩で反応させて麻薬成分を中和させ、海に流して捨てる方法となつたらしい。(注2)この事件を機に英中アヘン戦争が勃発し、敗北した中国は南京条

図版K：林則徐によるアヘンの処分



約を結んで開国して自由貿易の潮流にあらわれることになったのである。1833年にイギリス東インド会社の中国貿易独占権が廃止され、アジア貿易において自由貿易を推進するイギリスの動向と関連させて、エジプトと中国の同時代のできごととして提示することができよう。しかし、インドの場合は植民地化というより深刻な事態が進行していったことに留意するべきである。インドの植民

図版L：インドの鉄道



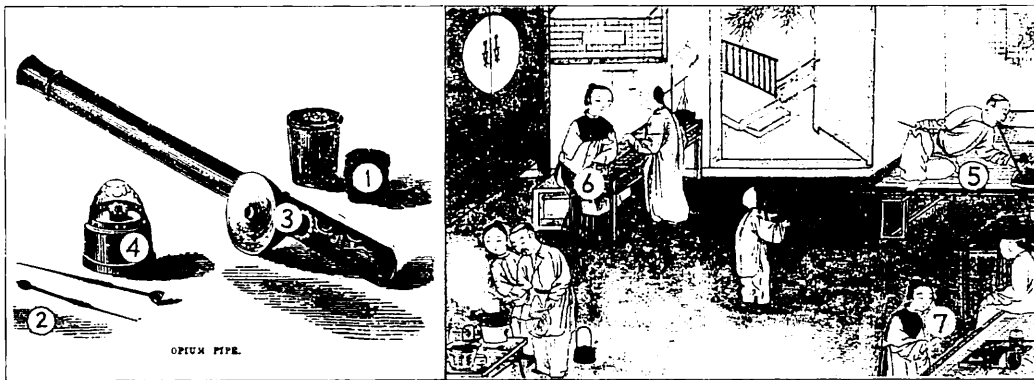
地化を扱う場合、東インド会社による土侯国併合の進展とディワーニー（徴税権）の獲得という観点、イギリス綿布の流入とインド経済の構造的変容という観点が考えられよう。次に示すのは後者の観点に関わるものである。

2-1ではイギリス資本主義の確立期における鉄道ブームをとりあげたが、インドでは19世紀中ごろから後半にかけてイギリスの投資活動によって鉄道敷設が急速に進められ、19世紀末には幹線のほとんどができあがったとされる。イギリスによる鉄道技術の輸出はヨーロッパ各地にもなされたが、多くの場合、鉄道敷設事業の進展は経済の工業化を促進するものであったにもかかわらず、インドの場合はこれに逆行するものとなったところに特色がある。(注3)イギリスにおける鉄道ブームが投機熱の高揚という形をとったことはすでに述べたが、インドの場合もイギリスの投資家

の安全な投機対象となっていたようである。インドの鉄道への投資には、元本保障制度という決して損をしないシステムが採用されていたことがその投機熱を促進した背景として大きいとされている。インドの鉄道が植民地化のための装置としていかに機能したかについては、吉岡昭彦氏が簡潔にまとめている。(注4) 第1にレールの幅が広軌・標準軌・狭軌という具合にふざろいであり、ヨーロッパの鉄道と違って、インドでは国内の市場の統合にきわめて不便であったこと。第2に路線設定が港湾集中型となっており、対外的な輸出入の便はあっても、国内の諸地域間での物資輸送には不便であったこと。したがって、綿花・アヘン・インディゴなどの輸出や綿織物などの工業製品の輸入という植民地型経済の維持に貢献していったこと。第3に鉄道料金の体系が港湾を中心とした路線ほど安価に設定され、国内諸地域間の輸送料金が割高に設定されていたこと。これも国内での地場産業の発達にハンディキャップをもたらし、インドの産業の成長を妨害する役割をはたしていったのである。吉岡氏は、インド政府の財源としての関税収入がイギリス本国側からの圧力で減らされる代償にインドに国内流通税を課すことも産業の発達を抑止する機能をはたしたとしており、鉄道の問題を中心に経済的関係としての植民地化過程を明らかにしたのである。(注5)

中国では鉄道敷設と列強の侵略を問題にする場合、19世紀末以降のことになるのでここではふれないでおく。中国が19世紀中ごろかかえた問題は何といてもアヘン問題である。図版Mは当時の吸飲所の光景を示したものである。インドから密輸入される生アヘン(土膏)のうちベンガル産のものを「公班土」と呼び上等な部類にしていた。名称の由来は東インド会社のCOMPANYである

図版M：アヘンの吸飲とその器具



とされている。①のように壺に小分けした生アヘンを②のヘラ(銀製が多い)でとり、キセルの③の部分にすりつけ、④のようなランプで下からあぶって溶かし、その際に発生する煙を吸引した。ほとんどは⑤のように横たわって吸引したようである。この図版の吸飲所は高級な場所と思われ、⑥の受付嬢や⑦の世話係の女性などが見えている。アヘンは麻薬であり常習化するものなので、密輸入によって中国社会に持ちこまれたとはいえ、その数量は膨大な数値を示し、その統計的数値は加藤祐三氏の著書に詳しい。(注6) したがって、中国の国民の健康上の害毒となったことはもちろん、伝統的に世界の銀を吸収してきた中国からイギリスへ銀の流出が顕著になっていったことが

問題であった。民衆の生活レベルで使われる通貨は銅錢であったが、納税は銀と決っていたので通常両替して納税しなければならなかった。アヘン問題が深刻になる以前は銀1両＝銅錢700～800文というのが相場だったようだが、銀の流出によってひきおこされた「銀貴錢賤」という現象は銅錢の価値を著しく低下させ、両替のレートも1両につき1600～1700文となったようである。(注7) 民衆の側にとっては税額がすえおかれたにせよ激しい「増税」となっていったわけで、これにアヘン戦争やアロー戦争の賠償金やら地方での拠出金やらで生活は破壊的に追いつめられていったのである。中国がアヘン戦争後の開国によってイギリスの綿織物の市場となったとは決していえないことは、1853年3月に出された「ミッチェル報告書」によって明らかにされているが(注8)、アヘン戦争後、アヘンの流入量はむしろ増加の傾向にあり、1880年代にピークをむかえたように中国社会はこれによって大きな打撃を受けていったことになった。19世紀中ごろのインド・中国について、植民地化と半植民地化という相違はあっても、イギリス資本主義との関係によってその伝統的社会構造は崩され、経済的・社会的な変容を余儀なくされていったことの共通性を見いだすことはできそうである。

### 3. 「19世紀中ごろの世界」の授業展開例

上記のような図像資料を実際の授業において使った場合、どのようになるかを次に提示しようと思う。教科書の内容構成に沿って授業を展開する場合、教科書や副教材に掲載されている写真や絵図を多用し、補足的に他の文献を利用するというのが通常とられる方法である。しかし、本稿のように教科書の配列を変更して内容を再構成した場合は、教科書や副教材をとばしたりもどったりしながら該当ページをさがさなくてはならず、生徒の学習活動も煩雑になりがちである。またこうした作業によって同時代的イメージの構築がしにくい欠点をとまうことになる。したがって、ここでは適当な図像資料をピックアップし、これらを順に配列して提示する方法が学習活動をしやすくする効果をねらった。

「19世紀中ごろの世界」という同時代の世界の学習は、時間的余裕があれば、教科書の内容に沿って学習を終えた後で主題学習として設定するのが生徒にとっても教師にとってもやりやすいはずである。しかし、現実には年間授業計画の中できりつめた授業を展開していることが多く、時間的余裕はほとんどないといってよい。そこで、復習の主題学習ではないものとしてこうした同時代的学習が展開されなければならないはずである。図像資料による「19世紀中ごろの世界」という内容は生徒にとって初めて学習することがらであり、授業展開において配慮されなくてはならないことに留意すべきである。すなわち、当該時代の世界像のイメージを獲得させることだけに留意したのではそれぞれの国家・地域の特性が見えなくなってしまうということである。だからといって、多くの時間を割いて細かい内容説明を展開するのではなく、全体像と個別の歴史的特色の双方が明らかにされなくてはならないはずである。

3-1. 資本主義社会の到来 (2時間配当)

3-1-1. 資本主義の確立と自由主義の進展 (第1時限)

	画像資料	学習する内容	指導上の留意点	備考
導入		19世紀中ごろのヨーロッパの特色  資本主義の確立	19世紀前半のヨーロッパと比較してどのような変化があるか概観する  自由主義が勝利したことがウィーン体制を崩す	
展開	図版A	イギリスにおける近代的工場制度	どういう工場か? 中央の男性は何している?	発問から解説へ
	図版B	資本主義確立期の労働問題  18世紀までのイギリスの世界商業の制覇  自由主義的改革 労働運動の展開	工場・炭坑での労働の実態  英仏植民地抗争での勝利 輸出産業としての綿織物  議会の動向を中心に オーウェンの活動、工場法	地図資料を併用
閉	図版C	自由貿易体制の確立 穀物法廃止	思想的背景 図版の英文を読みとらせる ピール首相の紹介・マンチェスター派議員の活躍 地主勢力は衰退したか?	発問  発問から解説へ
	図版D	19世紀中ごろの鉄道ブーム 鉄道の発達と資本主義	人びとのボーズは何? どういった人びとが投資家となったか(地主など)	発問から解説へ
		イギリス資本主義の特色	自由貿易体制・労働問題 ブルジョワジーと地主層	

3-1-2. 市民社会の到来 (第2時限)

導 入		ウィーン体制の矛盾  都市生活	19世紀前半以来の自由主義運 動とその挫折  交通・住居・衛生など現代に つながるように	復習的に概観 発問から展開
展      開	図版E    図版G 図版H  図版I	1848年のヨーロッパ二月革命 とその影響 「諸国民の春」  ブルジョワジーの覇権と保守化  ヴィクトリア時代のイギリス 繁栄と余暇 大英帝国の自信  都市生活の実態 スラムの成立 貧困と不衛生	革命における民衆運動 労働運動・社会主義の動向 被抑圧民族の自立運動 ウィーン体制の崩壊  どういふ場面か? 六月暴動の意味を明らかに  ロンドンの博物学 見せ物やイベントを見学する ことの社会的意味をさぐっ てみる 大陸の革命とイギリスの動向 を比較する  どういふ印象をえるか? 少年たちのポーズはどんなこ とを意味したか? アイルランドとイギリス近代 史との関連にふれる 病気(疫病)の流行	発問   万博をあれこれ あげてみる  発問 発問から解説へ  現代との比較
		資本主義の確立によってヨーロ ッパは どういふ社会になっ ていったか?	革命・ナショナリズムの方向 繁栄と貧困, 都市の実態	

3-2. アジア諸地域の変容 (2時間)

3-2-1. ヨーロッパ列強の進出 (第3時限)

導 入		植民地化とはどういうことか？ 16世紀以来のアジア貿易点から面の進出へ	ヨーロッパ各国の貿易拠点 進出の広がり と 深まり	地図資料を併用
展 開 1	図版 J          図版 K	イギリスによる自由貿易の主張 エジプト市場の開発 ムハンマド=アリー の 自立 スエズ運河  中国への開国要求  アヘン戦争 南京条約と中国の開国	綿花市場・インドへの中継点 としてのエジプト エジプト・トルコ戦争の経過 と意義 スエズ運河買収までの経緯 広東貿易制度 東インド会社の特権廃止 何をしている様子か？	発問から解説へ
展 開 2		東方問題  西アジアへの進出とオスマン帝国の改革  東南アジアへの進出 海峽植民地の形成  インドネシアの植民地化  ヴェトナムの植民地化	ロシアの南下とその抑制 ギリシア独立戦争 トルコマンチャーイ条約など広範なロシアの南下政策 と列強の対応を軸に  ラッフルズなどの紹介 イギリスの拠点拡大 ジャワの強制栽培制度 オランダの直接支配 フランスの段階的領有	地図資料を主に 使用
		アジア全域に及ぶヨーロッパ列強の進出	時代と地域を確認させる インド・中国の動向について 予告する	

3-2-2. インドの植民地化と中国の社会的混乱 (第4時限)

導 入		インドと中国の変容	完全に植民地となったインドと植民地にはならなかったが社会的混乱が激しかった中国をみることによって、アジアの矛盾を象徴的に扱う	
展 開	図版L          図版M	<p>インドの植民地化 東インド会社の土地支配</p> <p>土侯国併合 マラー、マイソール、シカ戦争 インドの鉄道</p> <p>植民地型農業国として</p> <p>中国の社会的混乱 アヘン問題 銀の国外流出と生活苦</p> <p>中国の綿産業</p>	<p>地稅徴収權を獲得した意義を理解させる</p> <p>誰がイギリス兵となったか (シパーヒーの意義)</p> <p>イギリスの鉄道ブームとほとんど同時代であること</p> <p>どのような鉄道だったか？</p> <p>軌道の多様化 路線設定の特色 運賃体系の実態</p> <p>綿花・アヘン・ジュート・インディゴなどの商品作物と鉄道輸送との関係</p> <p>何の國か？</p> <p>納税が銀で行われていたことに着目させる</p> <p>イギリス製綿布が中国を市場化しにくかったことにふれる</p>	<p>インドの地図を使用する</p> <p>レール軌道について発問</p> <p>発問から解説へ</p>
		アジア社会の変容とは？	民衆の生活が破壊的影響を受けたことに留意させる	



#### 4. 注および図像資料の出典一覧

##### 4-1. 注

- (1) 櫻庭信之『英国パブ・サイン物語』（酒場のフォークロア）59-60頁，研究社出版，1993.11
- (2) 増井経夫『中国の二つの悲劇』（アヘン戦争と太平天国）29頁，研文出版，1978.6
- (3) 角山栄『産業革命の群像』（現代社会の原点をさぐる）128頁，清水書院，1971.10
- (4) 吉岡昭彦『インドとイギリス』121-145頁，岩波新書，1975.7
- (5) 同上書，86-88頁
- (6) 加藤祐三『イギリスとアジア』（近代史の原画）135-139頁，岩波新書，1980.1
- (7) 野原四郎・小島晋治監訳『中国近代史1』（アヘン戦争と太平天国革命）19頁，三省堂，1981.5
- (8) 田中正俊『中国近代経済史研究序説』177-188頁，東京大学出版会，1973.7

なお、この書の末尾には「ミッチェル報告書」の全文（英文）が掲載されている。

##### 4-2. 図像資料の出典

- A : 加藤祐三『東アジアの近代』（ビジュアル版 世界の歴史17）45頁，講談社，1985.12
- B : 角山栄『産業革命の群像』（現代社会の原典をさぐる）112頁，清水書院，1971.10
- C : （世界史教科書）三省堂『世界史』229頁，1980.3
- D : 松村昌家編『パンチ素描集』（19世紀のロンドン）42-43頁，岩波文庫，1994.1
- E : 喜安朗『夢と反乱のフォブール』（1848年パリの民衆運動）30頁，山川出版社，1994.5
- F : 同上書，226頁
- G : R.D.オールティック『ロンドンの見せ物 II』391頁，国書刊行会，1990.2
- H : 加藤祐三，同上書，88頁
- 同種のものとしては，松村昌家編，同上書，83頁
- I : 松村昌家編，同上書，100-101頁
- J : 『朝日百科 世界の歴史103』（19世紀の世界 1 人物）C-661頁，1991. 11
- K : Solomon Band; TRADERS OF HONGKONG:SOME FOREIGN MERCHANT HOUSES,1841-99. 32頁，HONGKONG, 1993
- L : Burton F.Beers; WORLD HISTORY. p.511,U.S.A., 1893.
- M : R.H.Cobbold; PICTURES OF THE CHINESE. p.129, SINGAPORE, 1988
- Solomon Band, op.cit., p.39